

悲華經の成立、及び其の佛身觀

西 尾 京 雄

一、は し が き

悲華經の經名である悲華とは慈悲(Karuna)の白蓮華といふ意味であつて五濁の世に出で給へる釋迦佛をいふものである。その本緣法(Purvayogamārabhya dharma)は、佛が耆闍崛山に住し給ひし時、寂意菩薩に告ぐるやう、往昔恒河沙阿僧祇劫の善持大劫の時、此の世界を刪提嵐と名け、無諍念轉輪王が四天下を統御し千子あり、又、王には寶海梵志といふ婆羅門大臣があり、それに八十人の子あり、其の中の一人は出家成道して寶藏如來と號した。此の寶藏如來のもとに於て寶海梵志の勸請によつて無諍念王は四十八の大願を説き我が願ふ所の清淨佛土はかくの如くであり、我が願ふ所の衆生も亦此の如くである。若しも世界が清淨に衆生が亦かくの如くなることを得れば阿耨菩提を成せむと誓ふ。時に寶藏如來は善き哉と讃じ、これより西方百千萬億の佛土を過ぎて世界あり、當來の世、一恒河沙阿僧祇劫を過ぎて第二恒河沙阿僧祇劫に入る時、彼の世界を安樂と名づけ、汝、無量淨はそこにて菩提を成じ無量壽如來と號するであらうと告げられる。かくして王の千子も亦所願を述べ如來より授記をうける。第一太子不昉は觀世音と改め、當來安樂世界に於て遍出一切光明

功德山王如來と號するであらうと、第二王子尼摩を得大勢と、第三王子王衆を文殊師利と、第四能伽奴を金剛智慧功德と、第五王子無所畏を虚空印と、第六王子虚空を虚空日光明と、第七王子善臂を師子香と、第八王子泯圖を普賢と、第九王子密蘇を阿閼と、乃至、第十五王子を香手と名け、當來東方妙樂世界に於て成佛し金華如來と號するであらうと告げ、かく一千の王子皆記別を受け、皆當來悉く淨土を取ることを告げられる。

次に、寶海梵志の子八十人も亦父の勸請によつて無上菩提心を起し穢國成佛を願つてその所願の如く記をうける。梵志の弟子三億人も亦穢國成佛を願じ、其の中一千人を除き餘は皆過去劫に出現を望み毘婆尸、尸棄、及び毘婆娑の三如來はその中の最後成佛の人である。他の一千人中婆由比紐一人を除きて當來賢劫の中に成佛せむことを望み各々其の記を受け、拘留孫・伽那迦牟尼・迦葉・及び彌勒等はその最初成佛の人である。最後に、寶海梵志は無諍念王及び其千子は皆淨妙の世界を願つて不淨の土を取らず、又我が子及び弟子等は不淨の世界を取らむことを願じたが尙貪瞋痴の薄い時代を選むで五濁惡世の煩惱厚重の衆生を願ないことを歎じ因つて五百の誓願を發し、人壽百二十歳の惡世に出で、成佛せむことを願つた。時に、寶藏如來、大悲の深きを歎じ、記を授けて當來、娑婆世界に成佛して釋迦牟尼如來と稱するであらうと。

是等が、その梗概の大體であるが、寶藏如來が寶海梵志を讚する中に、淨土成佛の菩薩には四法

懈怠あり、穢土成佛の菩薩には四法精進がある。一には不淨世界を取らんことを願ふ、二には不淨人の中に於て佛事を作さんことを願ふ、三には成佛し已つて聲聞、辟支佛乘をも説かんことを願ふ、四には成佛し已つて壽命の長からず短かゝらざることを願ふ、是等の菩薩が菩薩摩訶薩であり、芬陀利華であつて餘華ではない。汝、今、佛前に於て大悲芬陀利を生せりとあるが、是れ本經の悲華(Karuṇā-puṇḍarīka)經といはるゝ所以である。是等によりて知らるゝ如く、あらゆる諸佛菩薩を淨土成佛と穢土成佛の二大部門に分ち、前者には特に彌陀を代表者とし、後者は釋迦佛を代表せしめて對比しつゝ釋迦如來の慈悲の偉大なることを顯彰した經典である。

此の悲華經中には述べしが如く、阿彌陀佛の本緣經が説かれ、「無量壽經」の諸本に傳ふるが如き四十八の本誓を説くから、淨土教の思想史に關心するものゝ見逃し得ないものである。然も、經錄には本經に四譯あつたと傳へて「無量壽經」諸本の譯經史と稽へて見るに矛盾すると考へられるが、其等が如何に解決さるゝであらうか。又、悲華經に於ける悲白蓮なる釋迦佛が如何なる佛身として考察されてゐるであらうかを余の佛身論の研究の上から一應考究して見ようと思ふ。

二、經錄に於ける悲華經譯傳

先づ悲華經の現存する諸本に一言するならば、第一に、大乘悲分陀利經、八卷がある。第一轉法輪品より第三十囑累品に至る三十品より成るが、失譯であつて經錄には秦譯とせらるゝ。

第二に、悲華經、十卷、第一轉法輪品、第二陀羅尼品、第三大施品、第四諸菩薩本授記品、第五檀波羅蜜品、第六入定三昧門品の六品に分る。北涼、玄始八年十二月(A. D. 419)、曇無讖の譯出したるもの。

又、此の經の燉煌出土の古寫經が、大谷大學圖書館に藏せられてゐるが、卷第二中に含まれ縮刷本にては「爲願人王、天王、聲聞、緣覺、……爾時、天王即知梵志之所念、與百千億無量夜叉」(宙三、p. 9 b. 7. 3—11 b. 7. 14)の一部分である。北京、京師圖書館藏燉煌寫經目錄(昭和法寶總目錄、第一卷p. 1058)にも、悲華經、二卷とある。二卷とは第一卷と第二卷の二卷のことであらうが、恐らく谷大本と同系統のものであらう。たゞ、大乘悲分陀利經でなくて悲華經が寫經として流布してゐることが注意してよからう。

第三、梵本、Karuṇā-puṇḍarikam, Ārat chandradās により校訂され、印度、カルカッタに於て一八九八年 „Buddhist Text Society of India” より公刊されてゐる。第一品 Dharmmacakrapravartana、第二品 Dhāraṇīmukha、第三品 Dānavisarga、第四品 Vyākaraṇa、第五品 Dānaparivartā の五品より成る。

第四、藏本、Hphags-pa shin-rje padma dkar-po shes-bya-ba theg-pa chen-pohi mdo. ナルタン版、甘殊爾、cha 函 (p. 187 b. 17—443 a. 7. 4.) 九世紀頃の出世なる印度親教師、勝友(Jina-mitra)、天

主覺(Surendra-bodhi)、智慧鐙(prajñā-varman)及び、大校修、譯官 Ye-çes-sde 等譯、闕、刊定であり、十五品より成る。

是等諸本の中に於て梵本と西本とは善く對同し、又、漢譯、大乘悲分陀利經と一致する。悲華經は増廣もされてゐるが一經として整備されてゐる。

今、此の經について漢譯々經史上四譯あつたと傳へられてゐる。即ち、開元釋教錄(唐、開元一八、A. D. 730 智昇撰)の總錄中、竺法護の條下(卷、第一、大正、五五、p. 495)、道襲(卷第四、p. 519)曇無讖(卷、第四 p. 519.)の條下、及び別錄中、有譯有本錄(卷、第一 p. 591)、有譯無本錄(p. 629)等によつて合せ述ぶるならば、

第一譯、閑居經、十卷、西晉三藏、竺法護譯、此は有譯無本錄の中に述べられ、總錄中にも今は闕として經名をあぐる。此處には閑居經、一卷、悲華經と等同本、異譯、初出、僧祐錄に見ゆと註してゐる。この總錄中の閑居經一卷とあるが悲華經と等同本とあるによつて一卷は十卷の違であると思はるゝが、然も諸版本の十卷としたものゝないことは注意してよいであらう。

第二譯、大悲分陀利經、八卷、失譯、今、附秦錄、總錄中には、亦大乘悲分陀利經、第二出、曇無讖譯と等同本とす。

第三譯、悲華經、十卷、北涼沙門、釋道襲譯、總錄の中には、第三出、法護、閑居經及び大悲分

陀利經、曇無讖悲華經と等同本、房云く古錄に見る、是先譯龔更に刪改するに似たりと、今、疑ふ、即ち、無讖出す者はか、と註す。

第四譯、悲華經、十卷、北涼天竺三藏、曇無讖、於姑臧譯、

總錄の中には、第四出、大悲分陀利經と等同本、竺道祖河西錄及僧祐に見ゆ、祐云、別錄或は龔上出すと云ふ。今、疑ふ、道龔、讖と同じ。是れ二經二處並び載す、恐く未だ然らざるなり、と註してゐる。

大周刊定衆經目錄、卷第三も亦是等四譯について等しく記載してゐる。今、其等を吟味するに先つて悲華經の支派經について述ぶるであらう。

三、悲華經の支派經について

今、開元釋教錄第十六卷、別錄中支派別行錄（大正五、五、p. 361）及び大周刊定衆經目錄第三卷、大乘重經目錄（大正、五五、p. 391）等によつて記述すれば、

- （一）陀羅尼法門六（種）動經、一卷、抄第一卷、右、後秦、羅什、於長安逍遙園譯、出長房錄。
- （二）彌勒菩薩本願待時成佛經、一卷、抄第一卷。
- （三）寶日光明菩薩問蓮華國相貌經、一卷、抄第一卷、右、西晉、竺法護譯、出長房錄。
- （四）梵志白佛說夢經、一卷、抄第二卷、右、道安云、晉代、法護出、見僧祐錄。

(五) 寶海梵志請如來經、一卷、抄第二卷、右、道安云、晉代、法護出、見僧祐錄。

(六) 寂意菩薩問五濁經、一卷、抄第二卷、或云寂音、右、西晉、惠帝代、聶道真譯、出長房錄。

(七) 梵志勸轉輪王發菩提心經、一卷、抄第二卷、右、道安云、晉代、法護譯出、見僧祐錄。

(八) 轉輪聖王發心求淨土經、一卷、抄第二卷、右、西晉、惠帝太康年、聶道真譯、出長房錄。

(九) 樹提摩納發菩提心誓願經、一卷、抄第五卷、右、道安云、晉代、法護出、見僧祐錄。

(一〇) 寶海梵志成就大悲經、一卷、抄第七卷、右、吳代、支謙譯、出長房錄。

(一一) 佛變時會身經、一卷、抄第十卷、右、後秦代、羅什譯、出長房錄。

(一二) 當來選擇諸惡世界經、一卷、抄第十卷、右、宋、文帝代、求那跋陀羅譯、出長房錄。

(一三) 一音演正法經、一卷、抄第十卷、或云顯正法、右、宋、文帝代、元嘉四年沙門釋智嚴譯、出

長房錄。

(一四) 五百王子作淨土願經、一卷、右、西晉、河內沙門、白法祖譯、出長房錄。

(一五) 過去行檀波羅蜜經、一卷、右、宋、文帝代、求那跋陀羅譯、出長房錄。

(一六) 觀世音求十方佛各爲受記經、一卷。

(一七) 東方善華世界佛座震動經、一卷、右、後秦代、羅什譯、出長房錄。

(一八) 文殊師利受記經、一卷、右、出真寂寺錄。

(二) 大悲比丘本願經、右、西晉、惠帝代、法炬法立譯、出長房錄。

(三) 過去香蓮華佛世界經、一卷、是真寂寺錄。

開元錄には是等二十經二十部を以つて悲華經より出づとしてゐる。大周刊定目錄には、閑古經、一部十卷としながら、悲華經より出づとしてゐることは注意すべきであらう。

是等悲華經の四譯の傳、並に支派經の經錄の傳説を考慮に入れて悲華經の成立が如何に考へらるべきであらうか、是について三つの場合が考へらるゝ。

第一、經錄の傳説を重んずる場合であつて吳 (A. D. 222—280) の支謙 (A. D. 223—253) に多數の經典譯出) の頃に悲華經既に成立してゐたであらうこと。何故なれば支派經を大部の中の抄出別行であると考へる以上、費長房の「歷代三寶記」(隋文帝、開皇一七年、A. D. 597) 第五卷、支謙の條下には、寶海梵志成就大悲經、一卷とあるからである。

第二は經典の歴史的發展に留意する場合であつて支派經を以て大部の支派別行とせず、其等の別行經は、經錄の傳ふるが如き年代に流布し、それぞれの譯者に譯されたものと見るもの、従つて悲華經は大悲分陀利經及び悲華經時代ある意圖を以つて經典作者が是等の支派經を素材として大部にまとめ上げたと見るのである。閑居經十卷といふも實は一卷の違であつて悲華經中の一部のものであつて其經の素材となつたものであらうと考へるのである。

第三は經典の流布の事情を重んずる場合であつて、即ち悲華經が曇無讖(A. D. 419)によつて譯さるゝや、民衆に對する隨宜化誘の目的の爲に大部のものより抄出せられて流行したものであらう。其等が流行してゐる間に譯者の名が忘れられ、其等の抄出經典が何時の間に、傳ふるが如き譯者に歸せられて古録の中に傳つたものが、目錄編纂者がそれによつて譯者の名を歸したものであらう。曇無讖が悲華經を譯し(A. D. 419)てより約百年の後に於て梁(A. D. 415—518)の武帝の天監年中に僧祐の編輯した「出三藏記集」(大正、五五、232)卷第四の「新集續撰失譯雜經錄」中には先にあげし支派經中の(二〇)、(二七)、(一一)、(一一)、(一八)、(二二)、(三三)、(六)、(一九)、(一四)、(九)、(一五)、(一二)等十三經があげられてゐる。然し是等には譯者の名が記されてゐないが「歷代三寶記」に於てはそれぞれ譯者の名が掲げられてゐる。尙、其等支派經の經名を見ると曇無讖譯悲華經の譯語と極めて善く一致することはこのことを裏書するであらう。

是等の三說に對して何れが事實に合するであらうか。第一の説は恐らく何人も多少の經典史眼を有するの人であるならば是認しないであらう。何故なれば悲華經の梗概に於て見らるゝ如く、此の經は淨土成佛思想に對する反動思想と見らるべきものであつて彌陀經典が流行しその思想の旺盛の時であることは何人も是認せねばならぬことであるし、又、其處に描かれてゐる彌陀の本願も無量壽經の四十八願を繼承してゐるものであり、又、その淨土に就いても二乗有ること無しと説く等到

底「大無量壽經」等に先行することが出来ぬものである。而して現存、康僧鎧譯(曹魏、嘉平四、A. D. 253)無量壽經は實は覺賢(東晉時代の人、A. D. 398—421 頃)に翻譯に従事し A. D. 429 七十一歳にて死す)の譯であるとは學界の認容する所であるから、吳(A. D. 222—280)の支謙、或は西晉(A. D. 265—316)竺法護の時代に於て大部悲華經の存在を認定することは不可能であるであらう。

次に第三の場合を考へて見るに悲華經(曇無讖譯)を中心とする限り閑居經の説明がつかなくなり其の他の支派經については經名の出づる所以を指示し得るけれども閑居經に限つてそれを指示し得ないし、又、經錄の傳説に對してあまりに無關心過ぎるであらう。

是等の缺點に對して第二の場合がより善く説明がつく様である。即ち、悲華經の素材となりし別行經が存在して後、ある意圖を以つて大部の悲華經の成立となつたものであらう。然らば、第一譯閑居經は如何に考へるべきものであらうか。

四、第一譯、閑居經

大部の悲華經は種々なる支派の諸經が先に存在し、而して後に悲華經作者が或る企劃のもとに大部に成立せしめたものでなからうかとの疑問は本經を讀む中に一々の物語の連續に於て感ずることである。例へば、悲華經卷第三に於て無諍念王の物語が終つて、その第一太子不眴、並に第二王子尼摩の授記が物語られてゐるが、其等は劉宋(A. D. 420—479)の法勇の譯した「觀世音菩薩得大勢

菩薩授記經」二卷(大正、一二)の授記物語を巧に應用したものでなからうか。此の經が悲華經の譯より後代であるが爲に此の反對の場合を豫想せしむるが、かく考ふるが妥當の様に思はるゝ。

〱 扱て、閑居經の名について吟味するであらう。閑居經が悲華經に同せらるゝのは「大周刊定目錄」に指示するが如く、費長房の「歷代三寶記」卷第十五、大乘修多羅有譯錄、第一に

閑居經、十卷、

大悲分陀利經、八卷、上二經、同本別譯異名、といふに據るものである。

此處に於て疑問とすべきは閑居經なる經名である、悲華經の梵名は 'Karuṇa-puṇḍarikāṇi nāma mahāyāna-Sūtra' であるから、大乘悲分陀利經、悲華經と譯さるべきものである。閑居經は全く縁無き經名である。然らば、此の悲華經は別名なのであらうか。本經の中には此の經を如何に名づくべきかについて十名をあげるが、今、梵、藏、漢に互つてあげるであらう。

1. 'Sarvajñatākāradhāraṇimukhapraśa. (p. 126) Thams-cad mkhyen-pa-ñid kyī rnam-par-ñiṅ-pa-ñi gzuñs kyī sgo, (p. 441. a) 入一切種智行陀羅尼門(秦譯)、解了一切陀羅尼門。2. 'Bahubuddhakam, Sais-tyas mai-po. 諸佛之藏(秦譯)、無量佛。3. 'Bahuṣaṇipātani, Mai-po ḥdus-pa. 多集(秦譯)、大衆。4. 'Bodhisattva-vyākaraṇani, Byan-chub-sems-dpaḥ luh-istan-pa. 授菩薩記(秦譯)、授菩薩記。5. 'Vaiśāradya-mārgottāraṇani, Mi-ñiṅs-pa-ñi lam-du srol-ba. 四無所畏出現於世(秦譯)、入無畏道。6.

Samādhanakalpāvataraṇa, 'Tīn-tse-ḥdsin gyi rtog-pa la ḥjug-pa. 入諸三昧(秦譯)、一切諸三昧門。7、
Buddhakseṭrasandaśana, Sams-rgyas kyi shiṅ kun-tu-ston-pa. 現諸佛土(秦譯)、示現諸佛世界。8、
Sīgaropama, Rgya-mtsho lta-ba, 如大海(秦譯)、猶如大海。9、Gaṇanāṭikrānta, Bgraṅ-ba las
yan-dag-par-ḥdas-pa. 過數(秦譯)、無量。10、Karuṇ-pyūṇḍarika, Shīr-tse padma dkar-po. 大悲分陀
利(秦譯)、大悲蓮華。

是等十名の中、正しく悲華經とは第十名によつて得られたるものであるが、閑居に相當する名を見出し得ぬのである。閑居の原名は Pratisaṃlaya, Patisaṃlāna (pāṭi), Nan-du-yan-dag-ḥzog. (Tib.) か、
Araṇyam (Tib. Dgon-pa) かであるべきである。十名とは何等關係なきことが知られる。

果して然らば閑居經とは悲華經と何等關係なき異なる經なのであらうか。經錄が傳へてゐる以上何等か關係ありと認むべきものであらう。それ故に大部悲華經との經名に於ては關係を見出すべくもないが、支派經として何等か關係を發見し得ぬか。即ち、悲華經の種々なる物語の主人公等の名に匹敵するものがないであらうか。此處に於て注意すべきことは阿彌陀佛の本緣物語として轉輪聖王、無諍念の梵名についてある。梵本に於ては、(一) Araṇemi. (p. 37. 47) (二) Aranemi (p. 17. 1. 8) (三) Araṇemya (P. 36. 4. 25, 37. 4. 1) に於て三つの異つた形を有する。而して、曇無讖は無諍念、秦譯は離諍と譯してゐるが、それは第一の原語を以つて A + raṇa と見て譯したるものであり、

藏譯 *Risids kyi mu-khyud*, は *Ara + nemi* (輻輳) と見て (二) の形によつて譯してゐる。閑居と譯するのは第三の形 *Aranemya* を *Araiyam* と見て譯したものであらう。それ故に、閑居經とは悲華經をいふものでなく、その素材となつたであらう無諍念物語の支派別行經をいふものであらうと推定するのである。

而して「歷代三寶記」の記事は閑居經が悲華經と關係あるといふ傳説があつたものを閑居經十卷と認めた爲に「同本別譯異名」の注となつたものであり、此が諸經錄に傳持せられたものと考へる。僧祐錄には閑居經一卷(但し、宋、元、明本十卷)とあり。又、開元錄の有譯無本錄には十卷としながら、竺法護の條下にては一卷としてゐる等はかへつて眞實を偶然の中に傳へてゐるものであらう。此の事はあまり好都合に説明せらるゝ様であるが、本經中物語の主要人物について諸本その名を一にせないものがあるのである。例へば悲華經中、此の大本生譚を進むる進行掛りでもあり。又、主人公である寶海梵志についてゐる。寶海といはるゝより、梵語は *Ratnasamudra* であると思はるゝ。然るに梵本では *Samudrarenu* (p. 17. l. 9)、藏本は梵本と同じく *Rgya-mtshohi rdul* (p. 217. b. l. 2) であるが、秦譯では海濟(婆羅門)と稱し、*Ratnasamudra* 或は *Samudrarenu* (海垢) の何れでもなく、*Samudratirtha* でないかと考へらるゝ。又、無諍念轉輪王の發願の後は無量清淨(秦譯、無量淨)と呼ばはるゝに對して梵本では *Amita-suddha*, *Amyta-suddha*, *Apramya-suddha* (Tib, *Dag-pa dpa-gtu-*

med-pa, Bdud-rtsi dag-pa-nid) の三の異つた語で見出さるゝによつても、閑居の説明が牽強附會といはれぬであらうと思ふ。

然もかく悲華經の第一譯としての閑居經を否定し去ることにより「無量壽經」等の淨土經典との歴史的關係が説明し得らるゝであらう。

次に、第二譯、大悲分陀利經、八卷に就ては現存するものであつて大正藏經第三卷に載せられてゐる。然し、本經は失譯となつてゐる。

現存する最古の經錄である僧祐の出三藏記集(梁、武帝、天監年間、A. D. 519)には、此の經名を載せず、法經等の撰である衆經目錄(隋文帝、開皇十三年、A. D. 594)の衆經異譯(大正、五五、p. 二二)、に於て曇無讖譯悲華經と共に大悲分陀利經、八卷として並べ舉げられてゐるが、其の譯人の名を記して居らない。それ故に既に西紀五九四年には失譯となつてゐたものの如くである。然るに費長房の「歷代三寶記」(隋文帝、開皇十七年、A. D. 597)卷、第十五(大正、四九、p. 109)有譯錄、第一に、閑古經、十卷、大悲分陀利經八卷、上二經同本異名となつてゐて失譯でなかつたらしいのであるが後者の譯人の名を缺き第九卷道龔及び曇無讖の條下を見ても悲華經十卷とあつて大悲分陀利經については無言であり、其の外にも記事を見出さぬ。

一方、道龔譯悲華經十卷があつたとするのは「歷代三寶記」卷、第九(大正、四九、p. 84)に於て

あるが、その根據は「出三藏記集」(大正、五五、p. 1)曇無讖の條下に於て悲華經十卷とし、其の細註に「別錄、或云、龔上出」とあるによつてある様に思はるゝ。而して是が、「大周刊定衆經目錄」、「開元釋教錄」に傳つたものと考へられる。この「別錄、或云、龔上出」とある記事によつて第三譯道龔譯を立てる「歷代三寶紀」の説は考慮すべきものであらう。此の別錄の傳ふるものを以て大悲分陀利經八卷とすべきではなかつたか。少なくとも「歷代三寶紀」の曇無讖譯の條下を見るにその悲華經十卷としてその細註には第二出としてゐるから、大悲分陀利經八卷と道龔譯とを同一視してゐるものゝ如くである。かく諸經錄を見て、此の經を以つて第一譯とすべきものであらう。尙、道龔は寶梁經、二卷(大寶積經、第四四會、寶梁會)を譯出(A. D. 402—412)してゐる。かくの如き失譯の憂目を見たのは、此の譯出より數年を出でずして曇無讖譯が出て流布した爲で、現に燉煌出土のそれも亦、大悲分陀利經でなくして悲華經の斷簡であることもそれを證明するであらう。開元錄、卷第四、曇無讖、條下に於て悲華經、十卷として、その細註に「僧祐錄、祐云別錄或云龔上出、今疑、道龔與讖同、是二經二處並載、恐未然也」(大正、五五、p. 519)とあるによつて、第三譯としての道龔譯を疑つてゐるが如くであるが、龔上の譯を以つて大悲分陀利經、八卷とするならば、此の批評は當を得たものではない。「歷代三寶紀」曇無讖、條下(大正、四九、p. 84)、悲華經、十卷の費長房の註には「第二出、見竺道祖河西錄、又古錄亦載、此前道龔已出、雖處年不同等是涼世出、疑前譯不善精

故、有兩文異、似再翻」とあり、前譯の不善精であり、兩文の異有つた爲に再翻したといふのである。恐らく事實に近きものであらう。

以上、論ずる所によつて第四譯、曇無讖譯とあるのは實は第二譯であること、此の曇無讖譯が西紀四一九年とせらるゝから、第一譯は四一〇年頃と假定して大過ないであらう。かく論定することによつて淨土教系の經典史と無理なく説明し得られる。

五、本經に於ける佛身觀の源流

扱て、穢土成佛せる釋尊を以つて諸佛の中の大慈悲ある白蓮華であることを説く悲華經は如何なる佛身として表現してゐるであらうか。

余の部派佛教に於ける佛身論の研究によれば、說一切有部に於ては、佛身を以て父母所生身(Matāpitrivitta-kāya)とし、隨つて有漏と主張し我々の肉體に同ずるのであるから、此處には佛身論としてこの發展を見なかつた。之に反して、大衆部、説出世部等は有部の佛身の父母所生身といふに反して自功德生身(Svaguṇanirvitta-kāya)であるから無漏であるといひ、三祇百大劫の過去の生涯に於て清淨業を積みて報ひ得られたる報身(Niṣyandakāya)とするのである。經部に於ては其等兩部を折衷せる如く、善惡業の異熟果として報身(vipākakāya)と見てゐる。大空派(Mahāśūnatāvādin)にありては最も理想化して、釋尊が此の世にお生れになつたと考ふることは正しくない。現世には

化身(Nirmāṇarūpa)を送つたので實身は兜率天に留り給ふたとするのである。

是等部派佛教の佛身觀の中に於て淨土敎系の經典は説出世部の佛身思想を繼承するものであり、大空派のそれは法華經に入つて釋迦佛の本地身思想を生み、悲華經は正しく經部の佛陀觀に據ると思はるゝ。

六、本經の佛身觀

本經に於ては釋迦佛は往昔、寶藏佛のみ所にて寶海梵志として五百の誓願を樹てゝ、此の穢土に於て成佛する。此處には五百の大願といふ如き理想的菩薩の本願を建てるのであるが、穢土を力説する以上歴史的存在としての制約を受けねばならぬ。故に、本經に於ては現實的な人間としての佛陀と、又、五百の誓願の報ひとして得られたる理想的佛陀とが描かれ、其の佛陀觀に於て矛盾せるが如くであるが、それがかへつて本經の特徴となつてゐる。この佛身觀を見ることによつて、理想的なる信仰上の釋迦佛が表現する時には阿彌陀如來としてか、或は毘盧舍那(Vairocana)佛として描かれねばならない契機が存する様に思はるゝ。

即ち、現實的な佛身としては、寶海梵志が寶藏如來の前にあつて五百の誓願を起す中に、煩惱熾盛の五濁惡世の人壽百二十歳の世に生れむことを願つてゐる。その出世に當つては一般佛傳に傳ふるが如く兜率天より下生して自在王家の第一夫人に托胎し、十ヶ月の後右脇より出胎して七歩を

行じ十地の中第三地を超過する。而して菩提樹に進みて第四地を超え、結跏趺坐して三昧に入り、一日一夜に半麻半米を食する。かくして、煩惱魔を破つて阿耨多羅三藐三菩提を成ずる。此處に於て、一々の衆生を阿羅漢勝妙果の中に安住せしめむ爲に現に殘業報身を受ける。この殘業報身と曇無讖の譯する梵語は *Sāvāsēṣakarma-phala*in (p. 78. 7. 19.) (Tib. *Las kyi phras-buñi lhaq-ma-dai-beas-pa* p. 341. b. 7. 4.) である。それ故に、この報身は *Vipaka-kāya* の意味にとるべきであつて此の限り經部の佛身觀を引くと見るは正しいであらう。この殘業報身であるから、正覺を成じ已つても殘害をうける。即ち、衆生有つて佛に瞋を生じ、刀杖、火坑、惡言、誹謗、罵詈、毒食等の業報を悉くうけるとする。

是等の記述を以つてすれば、本經に説かるゝ、寶海梵志の誓願に現はれたる釋尊の佛身は歴史的存在としてこの佛身を現はしてゐるものなることが知らるゝであらう。

之に反して、耆闍崛山の釋尊が、是等の本緣經を説き已つて更に大悲比丘(寶海梵志)の命終の後檀波羅蜜を説き、此の大悲菩薩の我身であることを知らしめらるゝ。かくして更に過去の檀波羅蜜乃至般若波羅蜜を説かるゝのである。此の説法によつて先づ東方善華世界の如來の座が六種に震動してその因縁が無垢功德光明王佛によつて説かれる。此處に於て光明王佛の釋迦佛を説明して一音聲を以て諸の種々異類の爲に説法するといひ、佛の色身亦無量無邊であつて人の能く其身量を知

るものなしといひ、大衆の佛の腹中に入るも腹邊を知り得ず、一毛孔の邊も天眼の能く知り得る所でないと説明してゐる。かくして十方諸佛の無邊の大菩薩が月光明無垢寶華を持つて娑婆世界耆闍崛山に來至し禮拜供養する。然るに是等一切大衆は如來の大神力によつて亭歷子の如く微細となり如來の身中に入り、釋尊の說法により、諸三昧を得、已つて再び如來の身の毛孔より出で、未曾有と歎じ、頭面作禮して本佛の所に還ると説いてゐる。かくの如く、信仰上の神祕的な佛身觀が敍べられてゐる。

七、結 語

以上の諸論を要約して述べるならば、悲華經に四譯ありと傳ふる經錄の傳説の中第一譯閑居經といふは大部悲華經の素材となつた一少部の經であること、第二譯、大悲分陀利經八卷が、悲華經としての第一譯であつて道襲の第三譯といふは、此をいふものであらう。従つて曇無讖譯が第二譯であり、その成立は西紀五世紀初頭として大過ないであらう。

又、本經の佛身觀は部派佛敎の經部の思想をうけ繼いで報身佛(Vipakṣya)である。現實的な佛身が表現さるべきこの經典がかへつて理想的佛身を顯し、この一見矛盾せる佛身觀が本經の特徴である。これ後世、釋尊が大毘盧舍那佛として華嚴經の佛身觀に發展したものと思はるゝ。